日本一の大井手と二国に跨る澪つくし

建部平野を縦断して流れている用水を「大井手用水」という。

井手は、一の口から旭川を斜めに上って、河の真中で止まっている。ここが備前と作州の国境だ。

この井手は、３２０年ほど前の寛文年間に津田永忠がつくった。
（推測される築造年代は、津田永忠の農業土木功績として伝承した年代より早く、関わったかどうかは定かでない。）

井手（井堰）の長さは５１５メートルで日本一の長さである。
（平成２１年岡山大学による実測で全長６２０～６５０メートルであることが明らかになった。）

この工事は難工事であった。川渡しに石の掛樋を架けたり、岩を割るのに油流しの方法を採るとか色々の工夫をこらした。

しかし、国境が河の央であるのが一番の難事であった。それで一文字堰を築かず、井手に砂が流れ込み易い斜め堰を国境まで築いた。

そして、井堰の一部に梁を架けて、洪水の時に胴木を上げて、水と砂を梁に流した。そして鮎や鰻をとって百姓の食膳を賑わした。

次の難事は、洪水で井手が流れない様にすることであった。それには、河をせき切るように巨石を置いた。これで激流をゆるめ、その流れを作州側に向けた。こうして作州と備前との間に澪をつくったのである。岩は今も残っていて、大岩、二大岩、ふとん岩、亀岩等といわれている。

澪は、水の瓦根で、水の深い所をいう。澪つくし（澪標）は澪を示す棒で、その標識である。

テレビで放送されていた「澪つくし」は、人の道を示し、人の為に身を尽くすこととにかけての題名であった。

（昭和６１年 旧建部町広報紙　郷土史家の投稿記事より抜粋）